

I-D-P-2

絶食負荷ラット胃小窩細胞および副細胞における酸性粘液分泌による胃粘膜防御機構

山崎幸直¹、上田敬¹、郡大裕¹、藤木典生¹、
今村好章²、福田優²

(福井医大第2内科¹、同病理²)

【目的】胃粘膜防御機構において重要な役割を演じている粘液分泌のメカニズムを明らかにするため、粘液分泌速度を低下させる目的でラットに長期絶食負荷を施し、胃粘液分泌動態とその質的変動について組織化学的に非絶食群と比較検討した。【方法】7週令のドンリュウ系雄性ラットを水道水の自由飲水下に7日間絶食負荷し、カルノア固定胃底腺組織に対し、AB-PAS, HID-AB, paradoxical ConA染色、³⁵SO₄-オートラジオグラフィ、電顕組織化学としてカコジル酸鉄コロイド反応およびacid phosphatase染色を行った。また、胃液分泌量とpH測定も合わせて行った。

【結果】絶食胃粘膜では酸分泌の著しい低下と酸性粘液の粘膜内蓄積が顕著に認められ、その分布は表層粘膜細胞や副細胞にまで拡大していた。非絶食群の表層粘膜ゲル層は中性粘液と酸性粘液が交互に折り重なる重層構造を示し、食事刺激に伴い胃小窩から噴出する酸性粘液の柱も観察された。また、胃小窩細胞の粘液顆粒はカコジル酸鉄コロイド反応の染色性より少なくとも4型に分類された。

【考察】胃小窩細胞および副細胞の酸性粘液分泌による胃酸分泌に対する胃小窩防御機構の存在が示唆された。

I-D-P-3

正常皮膚付属器におけるレクチン結合能の検討

藤田佳子、泉野良夫、螺良愛郎、森井外吉

(関西医大・2病理)

組織や細胞に存在する糖鎖構造の分布様式は、細胞間で差異を来すことが知られている。レクチンは、特定の糖鎖構造と特異的に結合するタンパクや糖タンパクの一種であり、その結合能の有無で糖鎖の性状や変化を把握することができる。我々は、成人皮膚生検材料を用いて、正常皮膚付属器におけるレクチン結合能を検討した。

【材料と方法】88症例の10%ホルマリン固定、パラフィン包埋の4 μm 切片で、ビオチン化レクチンの5種：PNA, SBA, DBAおよびUEA-1 (以上Vector社)とHPA (E-Y社)を用い、それらの結合能を夫々ABCキットで処理、DABで発色して検討した。

【結果と考察】エクリン汗腺分泌部では概ね暗調細胞はUEA-1陽性、明調細胞はHPA陽性。アポクリン腺分泌部の内腔側胞体縁はどのレクチンも散在性に陽性、成熟脂腺細胞はPNA、SBA、HPA陽性。内毛根鞘細胞は5種のレクチンとも陽性、外毛根鞘細胞全域でPNAが陽性を示してその他のレクチンは毛根鞘中間部のみに陽性。上述したような正常皮膚付属器細胞におけるレクチン結合能に性差はみられず、その把握は、皮膚付属器腫瘍鑑別に有用であろう。